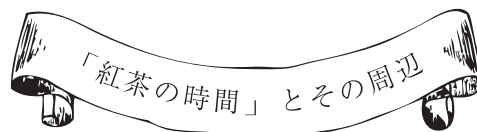


きもちは、 言葉を さがしている



第34話

水野 スウ

「ベテランズ・フォー・ピース」って

「ベテランズ・フォー・ピース」(平和をもとめる元軍人の会、略してVFP)とよばれる平和団体があります。従軍経験のあるアメリカの退役軍人さんたちが、1985年からはじめたもので、今はアメリカを中心に全世界で120以上の支部ができているそうです。2017年にはVFPの日本支部もできて、元自衛官、弁護士、それに会の主旨に賛同する市民が協力しあって、平和のために、戦争のリアルとコストを伝える活動をしています。

そのVFPメンバーがこの10月、はじめて石川県を訪れ、日本支部メンバーの元自衛官の人とともに、「僕たちがみた、戦場のリアル」と題して語ってくれました。私も彼らをよぶ実行委員の一人になって、間近に彼らのお話を聞くことができたので、今号のマガジンでその講演会のおすそわけを。

VFPジャパンツアーin石川

10月14日、「ベテランズ・フォー・ピース ジャパンツアー2018」でお話してくれたのは、アメリカから、ベトナム戦争に衛生兵として従軍した70代のマイク・ヘイスティさん、イラク戦争を経験した30代のネイサン・ルイスさん。日本からは、VFP日本支部をたちあげた、弁護士で事務局をされている武井由起子さんと、日本支部共同代表で、以前は自衛隊のレンジャー部隊にいた井筒高雄さん。

この日の講演会は、マイクさんとネイサンさん、二人の謝罪から始まりました。

「まず最初に、謝らなければなりません。アメリカが、第二次大戦でしたこと。原爆の投下も、日本全国での空襲の被害も、今なお続く、沖縄での米軍の駐留のことも」と。その後、その場の参加者全員で黙とうをしました。

黙とうに続いてはじまった二人のベテランズの語り、アメリカから一緒に来日して、今回の2週間

のツアーで彼らと行動を共にするレイチェルさんが、すばらしい日本語で通訳してくれます。

マイク・ヘスティさんのお話

——自分は、軍人一家でそだち、G.I.ジョーとよばれる兵士の人形で遊び、幼い頃から愛国心を刷り込まれて育った。そうやって育つと、戦争というものを違和感なく受け入れられるようになってしまうんだ。

ベトナム戦争でのソンミ村の虐殺事件は有名だが、それは決してソンミだけのことではなかった。ベトナムのいたるところで、同じような虐殺が毎日おこなわれたんだ。ごく普通のジッポのライターは、タバコに火をつける道具だが、同時に、村の家々に火をつけ、現地の人を焼き討ちにする恐ろしい武器にもなった。

ベトナムには2000万トンの枯葉剤が撒かれた。100万人を超える人がこの影響でなくなっているはずだよ。障がいを持った子どももたくさん生まれている。枯葉剤の被害は、3代目になった今現在の人にも起きている。それは代を追うごとにひどくなっているという。

ベトナムで自分が目撃したものは、米軍が内部から崩壊していく様だった。兵士の中には殺人をおかすもの、自殺するもの、ヘロイン中毒になるものなどがいた。

帰国してから、ベトナム戦争のすべてが完全な嘘だったとはっきり気づいた。嘘のために、400万人のベトナム、ラオス、カンボジアの人たちが死に、58000人の米兵が死んだんだ。生きて帰っても、その後、自殺した人の数はベトナム戦争で死んだ兵士の数よりも多い。ヘロイン中毒の友人がライフル銃で自殺しようとしてたのを、僕は救うことができなかった。

「嘘」が僕の一番大きな傷だ——Lie is my greatest wound. ベトナム戦争は嘘で塗り固められたものだ、と人々に一所懸命伝えようとしたんだが、人々はまるで信じなかった。真実を知ることが自分の価値観を崩壊させる時、人は信じることを拒否する。僕らは将棋の駒みたいに、

大企業の利益のためにただ使われたんだ、といくら話しても、まるで信じてもらえない。そのことがさらにさらに僕を傷つけた。

その後も世界で紛争のニュースを聞いたたび、古傷が傷む、フラッシュバックが起こる、悪夢を見る。「嘘」が僕の価値観を崩壊させた。そういうことが繰り返されるたび、I lost my identity——僕は自分のアイデンティティを失ってしまった。アル中にも苦しんだし（今はもう克服して、42年間飲んでいないけど）、うつで入院したこともあるよ。

僕は、嘘まみれに傷ついた。こういうのを、moral injury——良心の傷、っていうんだ。でもこうやって自分の経験を話すことが、僕の心の癒しにつながっている。

僕は地域の高校でも語っているよ。なぜなら、米軍のリクルーターが高校にきて子どもたちを軍に勧誘するからね。僕は青少年少女たちに、戦争が嘘ではじまるってことを伝えたいんだ。10代の彼らが葬式の対象にならないようにね。こうやって、僕は僕のすべきことをしているんだよ。

日本が、嘘をついているアメリカと手と手をつないでいることを、日本の人たちは知るべきだ。罪深いのは誰なのか。兵士なのか、ウォールストリートで軍需産業の株を買ってもうけている人たちか。

あなたたちは、米国という非道な戦争犯罪をする国に日本が加担するのを、見たいと思うかい？

ネイサン・ルイスさんのお話

——僕は、ニューヨーク州の田舎町で育った。マイクさんみたいな軍人一家ではなく、母は教師で父は労働者、たくさんの兄弟のいる家だった。

田舎の高校にはよく米軍のリクルーターが勧誘にくるんだ。カッコいい制服をきた軍のリクルーターは、聞くものが懂れるような話をする。僕も当たり前のように高校卒業と同時に陸軍に入った。それが2001年8月のこと。訓練がはじまって一週間目に、9.11のテロが起きた。

2003年、イラクに最初に派遣された部隊の中に、

僕はいた。イラクには6ヶ月ただけでアメリカに帰っただけで、そのことが僕の人生をものすごく大きく変えたんだ。

イラクで、アメリカの軍人たちが現地の人たちに向けるひどい人種差別にがまんできなかった、一刻も早く軍をやめたかった。退役してから大学に行ったけれど、その間にイラク戦争はもっと深みにはまっていった。ファルージャへのすさまじい爆撃があったし、そのころ、アブグレイブ収容所ではひどいことが起きていた。イラク人への屈辱的な拷問が行われていたんだ。

そういうことを知って、I was very angry and furious——僕は怒りでいっぱいになって、怒り狂った。嘘でイラク戦争を正当化したんだ。21歳の僕は怒りで満ちあふれていたよ。入隊したこと自体が大きなまちがいだったんだと、悔やんで悔やんで……。

だけど幸いなことに、僕はベテランズの人たちと出会った。ベトナム戦争の先輩たちが僕を救ってくれたんだ。そして、ベトナム戦争も嘘だったと気づいた。そして、軍の内部にいて戦争に反対し続けた人たちがいたことも知った。この活動が、そんな rich history を持ってると知ってまた、救われもした。イラク戦争の元軍人たちと集まって、僕も戦争反対の発言をするようになった。

ベテランズの仕事には、二つの大きな柱がある。一つは education——本当の戦争とはこういうものだよ、と人々に知らせること。もう一つは activism——行動で示していくこと。デモに行く、手紙を書く。時には、法を侵しても(!) 行動すること。

ベテランズでは、アートを通しての文化的な活動もしているんだ。軍服を細かく砕いて、その布を漉いて紙をつくるということをしている人もいる。その紙は、軍服からできているので combat paper——コンバットペーパーと呼ばれている。

このペーパーをつくる人の中には、第二次大戦の時に軍人だった人もいれば、イラク戦争でドローンを操縦していた人もいる。そうやってできたコ

ンバットペーパーを綴じてノートにしたり、日記帳のカバーにしたり、自分の体験をその紙に書いてもらったりする。彼らの中には、昔の傷を背負って生きていく、という絵を描いた人もいるよ。

こういうことは、一人ぼっちでするより、仲間とする方が効果があるんだ。こういうアートな活動を一緒にすることもまた、いのちを救っている。

僕自身も、無力感でうつになって、普通の生活がなかなかうまくできない時期があった。悪夢にさいなまれたりもした。

PTSDの core 芯は、contamination of soul——魂の汚染、たましいが汚されてしまうことだ。自分が戦場で何を見たかより、自分が何をしたか。実際に手を下したことの方がより深刻な影響を及ぼす。

戦地からもどって15年経つ。その頃よりは戦争による PTSD の理解が社会により広がったように思う。それはベテランの先輩である、マイクさんたちが PTSD を一般社会にしらしめてくれたからだ。

今日はこうやって皆さんの前で話せる機会を、本当にありがとう。

ベテランズさんたちが戦場での経験を語る、ということは、つらい記憶を思い出してよりつらくなることもきっとあるはず。と同時に、こうして語ることで自分を癒しているところもあるのだろうと思います。実際、マイクさんがそう言っていたように。

自分たちの経験が少しでも戦争の本当を伝えることになって、その話がもしか誰かの役に立つのだとしたら、それはまた少し、彼らの傷を癒すことになっていくのかもしれない。

彼らの話を聞いた私は、どうしたらいいだろう。彼らの言葉を自分の胸だけにとどめておかないで、間接的にでも、講演会に来られなかった人たちに知らせること、それ以外の人たちにも伝えること。それが私のできることの一つです。彼らに教えてもらったことをおはなしの出前先で語ったり、たとえばマガジン原稿にこうして彼らの言葉を文字にしたり、ということを通して。

井筒高雄さんのお話

——自分が現役の時の所属は、朝霞駐屯地の普通科連隊。この、普通科、っていうのは、戦争に行く最前線の人たちのことです。

北朝鮮の脅威を政府は度々言うけれど、朝鮮が持っている核は20発で、アメリカは6800発も持っている。核攻撃のことを言うなら、もし日本海側の原発のどれかが攻撃されたらどうするんだ、って言わなきゃいけない。その安全保障は何一つないのに、その危険性について政府はまったく言わない。

自衛隊はまだcombatではないが、本当に戦争のカードをきったら、どうなるのか、それを自分ごととしてとらえないといけない。自衛隊では年間70人が自殺しているけれど、これは普通科連隊でいえば2個小隊の隊員の数。実際に戦争してなくて、これです。この数の裏に、どれだけうつの人が潜在的にいるか、ということ。

2015年の安保法制ができる前までは、正当防衛の場合に限って武器使用が認められていたけれど、安保法制が通ってからは、「安全確保業務」という名目で武器が使えることになった。これは、自分たちの任務に支障があれば武器を使っている、ということ。そうなったらそれはもう交戦権の行使。これ、戦争、っていうんですよ。

アメリカのする戦争を、日本は止められない。アメリカの国益にかなうよう、自衛隊を献上する、ってこと。やられた方は在日米軍も日本も狙う、ということです。

井筒さんの言った「献上」という言葉にどきり、としました。文字通り、自衛隊を、隊員さんのいのちを、アメリカに差し出す、ということなんですよ。井筒さんのお話の前に、ベテランズのお2人から、いかに戦争が嘘で塗り固められているか、たっぷり聞いているだけに、嘘と差別ではじまる、矛盾だらけのアメリカの戦争に日本がつきあう、ってことのとんでもなさかひしひしと伝わってきました。

そうやってアメリカと行動をともにすることを、政府は、国際協調主義、とか、積極的平和主義、っ

て言うんだってことも、しっかり肝に銘じておかなきゃなりません。

憲法違反の、集団的自衛権を行使できる自衛隊を9条に書き込もう、というのが、今、自民党から提案されている9条の改憲案です。今後、実際に戦場に送られることもあるだろう自衛隊員さんたちの心が、ベテランズたちの負った心の傷やたましいの汚染といった状態になる可能性もおおいにある、ということなのです。

VFPジャパンの立ち上げに関わり、この事務局を担当している武井弁護士は、今の憲法をかえたら、政府は思いきり大きな嘘をつきますよ、と言っていました。マイクさん、ネイサンさんの話の中の、戦争は嘘だらけ、という言葉がまた胸に刺さります。

アレン・ネルソンさんのこと

マイクさんのお話を聞きながら、私は何度もアレン・ネルソンさんのことを思い出していました。アレンさんもマイクさんと同じ年代で、ほぼ同じ時代にベトナム戦争に行き、従軍していた1年3ヶ月の間にたくさんベトナムの人を殺し、そのことで彼自身もひどく傷ついて、帰国後、長いことPTSDに苦しんだ退役軍人の一人でしたから。

この日はアレンさんと深いつながりを持った加賀のお寺、光こう蘭坊の佐野明弘こうせんぼうご住職も参加されていて、会の最後にネルソンさんのお話を少ししてくださいました。このご住職が加賀にいてくださったおかげで、アレンさんが石川にお話に来た時、私は何度もアレンさんのお話をじかにきくことができたし、お寺にお泊まり合宿して、彼の非暴力トレーニングも受けることができたのです。

アレンさんのことをご存知ない方のために、ここで少しアレンさんのこと、ご紹介しますね。

「ネルソンさん、あなたは——」

ニューヨークのスラム街に住む当時18歳のアレンさんがたまたま通りを歩いていた時、親しげに声をかけてきた人は、海兵隊の採用担当の職員でした。その人は、かっこいい海兵隊員のポスターが何枚もはられたオフィスにアレンさんを招き入れ、君なら立派な海兵隊員になれる、これで、君も人から尊敬

されるアメリカ人になれるよ、と言って入隊を勧めました。貧しい母子家庭で育ったアレンさんには海兵隊の制服がまぶしく見え、これでもう食べるに困らなくなる、と彼はその場で入隊のサインをしたのです。

海兵隊の厳しい訓練の中で、若者たちはやがて殺人マシーンにつくりあげられていきました。教官は彼らに毎日、口答えするな、考えるな、お前たちのしたいことはなんだ、と言ひ、Kill! Kill!——殺すことだ、殺すことだ!と大声で言わせました。沖縄の基地で訓練の仕上げをして、沖縄からベトナムに飛び立ったアレンさん。そこは、思い描いていた正義の戦争とはまったく違う世界でした。ベトナムの戦場での日々、彼の心はだんだんと壊れていきました。

退役後、家に戻ったアレンさんは、毎晩毎晩、悪夢にうなされては叫び声をあげ、怖ろしい顔で家の中をうろつくようになりました。すっかり人が変わってしまった息子をお母さんはこわがり、彼を家から追い出すしかありませんでした。

ホームレスになって町をふらついていたアレンさんに、ある日、声をかけてきたのは高校の時の同窓生です。彼女は、彼がベトナムに行ったことを知っていて、彼女が先生をしている小学校のクラスの子どもたちに、アレンがベトナムで体験したことのお話をしにきてくれない? と頼みました。

自分にそんな話できるわけがないと初めは断ったものの、断りきれずとうとう学校にお話に行ったアレンさん。でも子どもたちの前で語ったのは、ごく表面的な話だけ、きれいごとの戦争の話でした。残酷な場面や、もちろん自分がベトナムでしたことには一切ふれませんでした。

話が終わると、質問するたくさんの方が上がりました。質問が出つくした頃、一人の女の子がまっすぐな目でアレンさんを見つめて、こう尋ねたのです。「ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか?」

そのとたん、アレンさんは誰かにお腹をなぐられたような衝撃をうけて、何も言えなくなってその場にたちつくし、目をつむってしまった、と言います。

ここで嘘をつくか、本当のことを言うか。真実を話せば、子どもたちは自分のことをおそろしいモン

スターのように思うだろう、怖がるだろう。だけど考えてみれば、自分に本当の戦争のことを誰も教えてくれなかったから、こうなってしまった自分がいるんだ。だとしたら、子どもたちには本当のことを知る権利があるはずだ。

ようやく、YES、と答えはしたものの、そのまま目を開けられずにいた時、自分のからだに誰かの手がふれるのを感じたアレンさん。目を開けると、さっきの質問をしたあの女の子が、アレンさんの腰にちいさな手を回して、抱きしめようとしているところでした。その子はやさしくアレンさんを抱きしめて、目に涙をいっぱいためて、「かわいそうなネルソンさん」と言ったのです。アレンさんはぼたぼたと大粒の涙を流して泣きました。クラス中の子どもたちがそばに寄ってきて、一人、また一人と、泣きながらアレンさんを抱きしめました。

戦争の本当を語る

この出来事が、自分をかえる最初のきっかけになった、とアレンさんは言っていました。過去を暗闇に閉じ込めるのではなく、戦争の本当を他者にいつかは語っていかねばならない自分なのだ、と。

それでも、戦争が原因のPTSDはその後、実に18年もの間、アレンさんを苦しめ続けました。すばらしいカウンセラーのダニエルズ先生と出逢ったことが、回復の一步でした。ダニエルズ先生は、アレンさんのカウンセリングの時に、毎回、同じ質問をしたのです。「あなたはなぜ、人々を殺したのですか」。何度聞かれてもその度に、「戦争だったから」「上官の命令にさからえなかったから」「自分がやられるから」「自分が生き延びるために」と言い訳を言って逃げていたことに、アレンさんはやがて気づき、とうとう治療をはじめてから9年たったある日、「私が、殺したかったからです」と答え、その日から約2週間、アレンさんは涙を流し続けたと言います。

そういう苦しみと悲しみを経た後によりやく、アレンさんはアメリカの子どもたちの前で、戦争の本当と自分のしてきたことを語るようになりました。1995年に沖縄で、12歳の少女が米軍基地の3人の米兵に暴行されたことを知ったアレンさんは、その翌年から日本でも、戦争の本当を語りはじめました。

日本には9条というすばらしい憲法がある、と友人から教えてもらって感動したアレンさんは、戦争の本当の話とあわせて、9条のことも語るようになったのです。

「日本国憲法第9条は、いかなる核兵器よりも強力で、いかなる国のいかなる軍隊よりも強い。9条があるから、日本の子どもたちは戦争を知らずにこられたのだよ。9条はたくさんの人たちの悲しみの涙から生まれてきた。こんな悲しみをもう二度と繰り返したくない、という願いが誓いになったもの。それによって平和になるというよりも、9条が存在していること、そのものが希望なのだよ」と。

そう語るアレンさんの存在を知った加賀のお寺の佐野さんが、アレンさんと出逢い、彼を何度も石川にお呼びしては、講演会を開いてくださったのです。

ベトナム戦争時に大量に撒かれた枯葉剤の影響もおそらくあったのでしょう、アレンさんは2009年に白血病で亡くなりました。晩年の5年間、アレンさんと佐野さんは互いに深い想いでつながり、宗教についても語り合いを重ね、やがてアレンさんは佐野さんを心の師とまで仰ぐようになりました。アレンさんの生前の意思により、彼のお骨は今も光闡坊の御本堂の下に納められています。

もうひとつの、謝罪

アレンさんの紹介がだいぶ長くなってしまったけれど、ここからはまた石川でのVFPジャパンツアーの場面に話を戻しますね。

トークの後の質問タイムの中で、ある若者が手をあげました。

「今日の講演会が、まず謝罪から始まったことにびっくりしました。日本も、アメリカに対して謝るべきだと思う。そうじゃないとフェアじゃないと思うんで。だから、僕らも、すいませんでした！」

そういつて彼は帽子を脱ぐなり、深々とお辞儀をしたのです。その背中を見て、あ、ここのところ、紅茶の時間によく来ているKくんだ、とわかりました。胸がじいんとして、ありがとう！って思った時、

会場からあつたかい拍手がわきおこりました。

「僕には何が本当なのかわからない。でもあなたが発信していることは、真実と思って帰っていいでしょうか。今日この場に参加できて本当によかったです」とKくん。

海をこえて、世代をこえて、平和を願うきょうだいたい同士のきもちが謝罪しあい、呼応しあつた、そんな瞬間でした。

加賀のお寺にお墓まいり

VFPのマイクさんとネイサンさんは、ジャパンツアーの過密スケジュールの貴重なオフの日に、ふたたび石川にやってきました。ベテランズのいわば大先輩にあたる、アレン・ネルソンさんのお墓参りをどうしてもしたいと、加賀の光闡坊を訪ねたのです。

ご住職の佐野さんが語るアレンさんのお話にじっと耳を傾け、時に質問する、自分の心のうちを語る、マイクさん、ネイサンさん。佐野さんの言葉は、時にアレンさんの言葉であり、ご自身の言葉であり。漏れ聞こえる声から、なにかとても大切な対話を交わしているのがわかりました。お寺の本堂で、亡きアレンさんをまじえてベテランズ同士の、魂が交流しているかのような時間。時折はげしい雷鳴がとどろいていました。

佐野さんが二人に語りかけます。

「暗い過去には、恥の概念が伴うものです。自分がやったこととは別にね、自分自身がどうしようもなく悪い人間なんだ、というきもち。それをアレンさんはオープンにしていた。悲しみや苦悩を自分の中から解き放っていった時にはじめて、やすらぎが訪れる。だから、あやまること、心からごめんなさい、っていうことが、とても大事なんです。その意味で、日本は国としてPTSDにかかっている、ってアレンさんはよく言っていた、だって本気であやまっていませんからね」

その言葉をうけて、マイクさんが

「アメリカもPTSDに病む国だ。その国からアレンさんが、凄惨な戦争を経験した日本を選んで来た、ってことはとっても reasonable、そこに深い意味があると思う」

この日は、メディアの人たちも取材に来ていました。マイクさんは、日本の人たちに送るメッセージとして、

「ベトナム戦争の時、韓国の兵士もアメリカ兵と一緒に多量の殺りくをしたんだよ。9条がかえられたら、日本も米軍の指揮下にはいって、かつての韓国兵と同じことをすることになる。戦争とは、mass murder——大量殺人だ。それが帝国のめざすところなんだ。広島、長崎、そして大空襲、と経験した日本の人たちこそが、リーダーシップを持って核兵器廃絶を求め、平和な世の中をつくっていく担い手になるべき人たちなんだよ」

と厳しい表情で語っていました。マイクさんのこの言葉の重みを、私たちの一人ひとりはどこまで自覚できているだろう。

素晴らしい通訳の仕事してくれたレイチェルさん。ベトナム戦争とイラク戦争、二つのちがう戦争を経験した二人からこうして同時に話してもらう。こういうことって、ベテランズ・フォー・ピースからできることなんです、とレイチェルさんが言っていました。

ああ、ほんとにその通り。時代も背景もちがう二つの戦争、だけでもどちらも嘘ではじまり、嘘だらけだった、っていう点では、まったく共通している。きっとこれから起きる戦争だって、そこは同じはず。そのことを、私は今回、がつん、と受け止めなきゃいけない、と思っています。

草かふえでふりかえり

紅茶の時間内、毎週1時間の草かふえでは、いい講演を聞いた次の週はたいてい、そのふりかえりをします。講演会には参加していなかった人に、お話の内容をわかりやすく伝える練習も兼ねながら、講師のお話のキーワードをそれぞれに思い出して語ります。

この日は、マイクさんネイサンさんのお話のふりかえりをしました。そこにちょうどKくんもやってきたので、彼があんなふうに謝罪しようと思った時のきもちを尋ねてみました。Kくんは、あの時の2

人が、国対国、ではなくて、対個人として謝罪した、そのまっすぐなきもちに打たれて、おもわずあんな行動をしたみたいです、と言っていました、その日の夜、KくんがFacebookに、あらためてあの時のきもちをこんな言葉にしてくれていました。

今日まで、自分のとった行動についてうまく説明ができずにいましたが…。アウトプットの時間を頂いたおかげで、この時の気持ちを振り返り、自分の行動によく納得できました。

過去の大戦で先人達がした行動の過ち・沖縄駐留含め、今も自国が行なっている行動を人ごとにせず、自分の人生に背負って、謝罪してくれたマイクさん、ネイサンさんから、「真」？「魂」？なんというか、偽りのない「誠の心」を感じたからだと思います。そして、自らの辛い経験・記憶を抱えながらも真実を伝えようとしてくれた2人を、心からリスペクトした。

きっと、自分は、マイクさん、ネイサンさんと友達になりたかったんだと思います。国も年齢も違うし、すぐに会うこともないけど、これからの平和を共につくっていく、そういう、友達になりたかった。

だから、一方だけが、謝罪した状態で、共に平和をつくっていくことなんて出来るはずがない。そんなのフェアじゃない。と思ったんだと今、整理が出来ました。

「日本」だの「アメリカ」だのという、顔の見えない国の名前で個人の関係性まで、がんじがらめにされるのは、御免です。

僕はマイクさんとネイサンさんが好きです！！

“In peace and brotherhood”

最後の英語の言葉は、ネイサンさんがあの日、Kくんにプレゼントしたコンバットペーパーの紙にサインした時に添えられていた言葉でした。

彼がFacebookにアップした、きもちの言葉はすぐにレイチェルさんにもシェアされて、ベテランズの二人に翻訳して伝えてくれたそうです。

Kくんは、草かふえの中でもきもちを語ってくれていたけれど、さらにこうして文字にしてくれたこ

とで、より深くわかった気がします。そうか、そうだったんだね、ともだちになるには片方だけが謝って、っていうんじゃ平らではない、それってフェアじゃないよなあ、というところ、その感性がなんともすてきだ、と思いました。

今回のKくんに限らず、きもちは、いつだって言葉をさがしている。あの時のきもちはなんだったの

だろう、自分はなぜああしたのだろう。時間がたってふりかえてみて、今感じるきもちは、たぶんこんなかな、こうだろうか、それとも……と、そのつど言葉にしていくことで、またあたらしい気づきがその人の中に生まれてくるんでしょうね。

2018.11.17



*Behind
the words...*